孝明天皇紀

一

卷一
自天保二年
至天保六年上

卷二
自天保六年下
至天保十年

288.41
K053K18
W

宮内庁書陵部

小川文庫

孝明天皇紀

凡例

一此書先帝降誕の天保二年六月十四日に起り慶應二年十二月二十九日の崩御に至り三十六年間の事を紀す全部二百二十卷合せて一百十七冊と爲し首に摘要目錄引用書目等二冊を副へ別に繪圖二帖を附す

一此書の體事を以て日に繫く每條其首に大要を揭けて綱と爲し下記錄文書を收めて目と爲す

一此書日月の序に從へとも一事の顚末各所に散見の弊を避け務めて一所に湊歸するの體を用ふ故

国立国会図書館 27.6.13

270592

に事の數日數月に亙るの類其目を分割せず主旨所在の日或は初見の日に併載しまた附錄備考と題して關聯の事條を其下に收む

一紀事の本末一所に類聚の體を用ふれとも引用諸書の複雜に渉りて却て閲覽に便ならさるものは猶分載して其由を條末に錄す

一綱目の書體都て平出闕字闕畫の例を用ひされとも官符宣旨の類は大抵原體に據る但外記史等の位署に合字體を用ふるものは今皆普通の字體に更む

一綱文の人名廷臣は姓名を書して下に稱號を註し武臣は將軍以下皆其族稱を書す

一綱文中某藩主某と書して其國名等を註せさるは本紀慶應元年七月の條に藩名表あるか故なり

一目は一に原文に從ふと雖とも叙事頻繁に渉るものは節略して其要を撮る

一目の記文中複雜を免かれさるものありと雖とも猶史料の體に倣ひて之を避さるは其事狀を精確にせんか爲なり

一目の原文御樣殿の三字行草に依て尊卑の別あれとも今一に楷書を用ふ但女官の記は假字文なるを以て眞草交へ用ひ其假字の正格に違へるもの

も皆原書に從ふ

一目中當年の記錄を當年に收むるものは單に月日を書し當年に非さるものは其年を書して之を區別す

一目中編者の自註に係るものは上略下略等の外首に圈を置て原註と混せさらしめ文書の標題も亦之に倣ふ

一目中原註の註は括弧を加へて直行に書し各條下に編者の考證を錄するものは首に按の字を置て本文と別つ

一目中の難語に義解或は人名の下に官氏等を註記するの類別に例を設けす時宜に從ひて取捨す但假字書は右旁に眞字を註し記文の名目等に讀法あるものは左旁に假字を註す

一此書の事實踐祚以前の諸儀諸條事の聖躬に係らさるものは載せす踐祚以後恒例臨時大小の禮典及宮中の事條皆書す但恒例中四方拜三節會新嘗祭內侍所御神樂等は每年之を揭けて出御の有無を知らしめ他は初見の條に一例を書して別に事故なきものは次年より之を省く其目に年中行事を引くものは則恒例の初出なり

一此書主として先帝の事を紀す故に京外の災異等

事の朝廷に係らさるものは別に之を掲けす又内治外交の始末事の天聽に達せすして幕府及諸藩の處分に止まるものも亦之に倣ふ

一國家の大勢海外の事情幕政藩治の得失等紀すへきもの多しと雖とも本紀は事實の主客を分ちて之を別の史傳に讓る

一神階宣下の位記及國師號等勅書の類記文完備に至らされとも所見のものは皆之を掲く

一皇族の親王宣下必書す叙品任官は目を其條中に收むまた御養子等の仰出されは先帝の御養子御猶子に非さるもの皆略して親王宣下の條下に附記す

一官職の任罷は踐祚以前御肝煎以下其要職を掲け踐祚以後は准大臣以上議奏傳奏國事掛等の諸役及將軍宣下の外之を略し位階の陞叙は總て掲けす但賞罰黜陟の重きに係る者は堂上武家皆任叙罷免を書す贈官位の事も亦之に倣ふ

一皇族及廷臣の薨逝は廢朝或は御心喪等あるもの必書すまた將軍一族の卒去に宮中停音の類初出の一例を擧て餘は載せす但踐祚以前の御慎停音等は皇親の外之を省く

一紀中の事體に於て疎密一ならさるは引書の具備

と否とに因る故に遺漏の憾なしとせされとも已を得されはなり

一引用書採擇の事狀は目錄の條に註せり其原書に缺損若くは文中に空白あるものは尖點或は方形を字句の間に塡む

以上二十三件は其例の概略なり此他は本紀の諸條に就て之を辯す

孝明天皇紀卷一

天保三年壬辰 六月十四日甲午降誕

後勁現記

正月廿七日關白殿被命曰於御學問所御椽座敷權典侍局懷姙候御産所正親町家御治定内々著帶相整候御産之儀御世話御役之邊ニテ池尻前大納言被仰付候中略婦人之中御世話申上候輩無之故四辻家娘千枝被仰付候尤此婦人元嫁正親町家離別ニ相成候者ニハ候得共守貞節候由有聞且權典侍局誕生之人ニモ候得ハ宮御世話可行屆歟旁四辻之女ニテ御世話被仰付候

正親町家記 五月十一日權典侍著帶於御所有御作

法權典侍正親町家へ被下從禁中御産御調度類○目略品
御蚊帳等廻ル御蚊帳鈎初御産氣ヨリ十日計以前官人之娘
雙親之輩七人奉仕一人ハ實德妻康子以下社司樂人等女畢テ於御蚊
帳之内口祝ヲ賜フ御初衣御縫初人員同上
六月十四日御産氣御催ニ付朝廷ヘ言上陰陽頭土御門晴親召設
御降誕大御乳人御使御守刀被進御産ニ付詰四辻
公説清水谷實揖橋本實久實德小番被免御用勤仕
産婆ハ吉田若狹ヘ被仰付御箆親辻和泉守娘○和泉守
は口向執次也御胞衣ハ若宮八幡社地ニ被納
〔實久卿記〕六月十四日甲午晴向正親町亭權典侍有

御産氣仍人々參會申刻計平産皇子降誕也則申慶
賀池尻前大納言今度御世話卿也四辻前大納言清水谷中
納言等申合雜事
〔小佐治光文日記〕五月十一日壬戌今日權典侍殿御著
帶ニ付○是日は表向の御著帶御祝小戴○小戴或は兒戴に作る圓形の餅片に少許の小豆餡を盛たるもの五鯛二奥ヨリ被下御降誕宮様御匙太
田肥後守
六月十四日甲午申刻權典侍殿御平産皇子御降誕御
機嫌能被爲成候旨以廻狀子刻頃申來
〔按〕天皇は仁孝天皇第四皇子御母は新朔平門
院諱は祺子鷹司關白政通養女實鷹司政熙女御生母は新待賢門院

諱は雅子正親町贈左大臣實光女なり今降誕の年月を陽暦に推歩すれは紀元二千四百九十一年七月廿二日に當り時刻の申は則夕七ツ時にして今の午後五時四十分許なり又御産所の正親町家は皇居の東南清和院門外の東廣小路の南にありき

御胞衣の埋藏地若宮八幡社は賀茂川の東五條坂の北にありて其御胞衣の松は社前の東方に存す但埋藏の日時は社記及公私の文書に見ゆる所なし因て之を正親町從一位實德に問に舊記散佚知ること能はされとも降誕の期土用中なりしを以て假に之を宅地の吉方に藏め土用終るの後吉日を選ひて社地に納む云々と答へらる但土御門陰陽頭晴雄御産御用日時記嘉永五年九月の條に

中山家來狀土用中宮降誕之節御胞衣假埋致置候御先例之趣ニ候即天保二年熙宮御降誕之節モ内々方角勘進之由被示仍勘進候様申來天保度御七夜ニ假埋ニ相成候趣云々

と見えたれとも猶天保度の日時は詳ならす蓋御胞衣埋納の作法は嘉永五年九月の條と

同例なるへし參看を要す

二十日庚子熙宮と稱す

〔外様言渡〕六月十七日就來廿日四皇子御七夜御所御所准后御産所等へ可有參賀獻物之儀ハ禁中御産所等計當日獻物可然重服之輩ハ翌日可有參賀不及獻物之旨日野西前中納言被申渡下略

〔正親町家記〕六月廿日御七夜御命名大御乳人御使熙比呂御直筆備中檀紙三ッ折同紙上包

一同拜見不被許依テ正親町中將書寫シ一同へ披露御七夜ニ付禁中仙洞大宮ヨリ御初衣被進

〔按〕御名字勘申文の寫諸書見ゆる所なし蓋舊例菅原家の勘申に係るを以て之を子爵高辻修長に問に熙宮字出所取調候處勘申文寫無之只一二記錄ニ以長勘申之由有之而已云々との答書あり以長は修長の父是時從三位式部權大輔兼文章博士なり

七月十四日甲子御參内始

〔後勁槐記〕七月十四日甲子晴熙宮御參内也御世話卿暉房幷御降誕後詰輩爲御見送寅刻參集御在所予鴈衣奴袴先謁中將申賀詞窺御機嫌賜祝酒蛤吸物一里塚重肴湯漬如平日形飯二ッ或鳥ノ子形ト稱ス等卯半刻日未昇山頂御參催權典侍局勤御乘副御世話以下於門内奉見送御輿過御之間各蹲

居御出門之後又於門外御列拜見下略

〔正親町家記〕七月十四日御宮參之日御參內今日雙親番ニ付雙親之者計供奉御列先行使番十人御板輿御乘添權典侍御輿脇瀧口官人二人御用掛取次辻和泉守順義御列外御世話卿池尻暉房

〔按〕御宮參は內侍所に御參拜を謂ふ是日より御生母權典侍の局を以て御在所とす御宮參以下九條道孝等の親話に據る蓋正親町家記は追錄に係るを以て多少の省略あれとも後勁槐記に據れは御參內の行列左の如し

六門番二人仕丁一人御使番十人二行各麻上下瀧口四人二行

各直垂御板輿丁八人列外典藥寮太田肥後守岡本丹後介各狩衣左右に從ふ

辻和泉守狩衣預二人持一人雨皮持笠籠三麻上荷押下

同心六人與力二人

十月十五日癸巳御箸初

〔正親町家記〕御箸初折櫃一合內敷鳥子二枚松重萌木紫

入白餅二重四角ニ松ニ鶴作物ヲサス

〔諸儀雜集〕

御箸初之事

左　青石二ツヲ小捻ニテ括リ御皿ニ置ク

中　小御茶碗ニ御粥ヲ入レ御箸二前ヲ添フ

右　カナ頭二疋ヲ小捻ニテ括リ御皿ニ置ク

270592

典侍掌侍ノ内御陪膳御祝御内儀沙汰也右御箸初之後御祝之度毎ニ御膳ヲ供ス

〔按〕御箸初の月日別に見ゆる所なし毎度の例を推に御降誕の日より第百二十日に至りて此儀あり因て之を茲に揭く

三年壬辰十二月十四日丙辰御髪置

〔小佐治光文日記〕十二月十四日丙辰熙宮様御髪置ニ付小戴御祝酒吸物等被下

〔諸儀雜集〕御髪置之事御七夜前日ニ御頭髪ヲ剃リ御ケシ（御頂上の御髪を謂ふ）ヲ殘シ奉ル爾後度々御剃申上候ニ付御髪置ヨリ御髪ヲ剃ラス延シ置キ奉ル御祝御内儀沙汰也

四年癸巳三月二十一日壬辰准后の里殿に渡御三日を經て還らせ給ふ

〔小佐治光文日記〕三月廿四日乙未熙宮様去廿一日准后御方御里御殿へ御下リ之處今日午刻過還御御機嫌克被爲成候事

〔按〕里御殿は石藥師門内の南中筋の東に在り左に前條の類例を附收して考に備ふ

〔顯孝卿記〕天保六年九月六日子刻許自園中納言廻文到來（取要）此節御神事中准后里殿へ御下リ之間儲君御乳若月障有之時臨時ニ里殿へ儲君渡御之儀

難計之間自御肝煎卿三卿○御肝煎及三卿の事は天保六年六月廿一日の條に見ゆ心得之事等明日可被示之間別當午刻頃參朝之樣被示

八日今朝自別當書狀到來記左

今日按察卿面會候所昨夜被示候儲君里御殿へ可有御退出哉之事一昨日自御内儀御沙汰ニ付爲豫備被示候由

准后御車寄ヨリ出御御板輿也列外醫師之跡ヨリ三卿三人同御隨從之事但自准后大門渡御之事

右已前從便門里殿へ眞實内々渡御御時宜候是亦御肝煎卿三卿三人自跡奉從之事下略

十二月十八日甲寅御色直

〔小佐治光文日記〕十二月十八日甲寅今日熙宮樣御色直ニ付御祝被下

〔諸儀雜集〕御色直之事御降誕ヨリ御厚疊緣白無地紋御几帳御夜具御服以上白無地紋御產衣胡粉ヲ以テ御脊ニ御紋ヲ置キ其周圍ニ又胡粉ヲ以テ松竹梅鶴龜ヲ畫ク悉皆白色御用之處御色直之時ヨリ紅紫等之色召物ヲ被爲召御祝御内儀沙汰

〔按〕前後の年間記錄に乏く天保五年の如きは事の揭くへき者なし

六年乙未六月二十一日己酉儲君と爲り給ふ御年五准后藤原氏御子として養はせ給ふ是日前權大納言藤原

建房萬里小路を御肝煎と爲し右衛門督藤原言知山科權中納言藤原基茂園藤原顯孝葉室を儲君三卿と爲す

〔議奏御用之記〕五月二十日勅問衆○攝家并兩役○議奏傳各相揃之間其旨殿下○關白鷹司政通を指す へ申入了殿下被命云兩役相揃可參于八景間者相役申示武傳以非藏人相招申示則一統參八景間殿下尋常御座兩役東上南面列候各間內也熙宮追々御生長依之可爲准后御養子尤御實子御同樣之思召候被定儲君來八九月之間立親王宣下從仙洞被仰進從准后モ被仰上候右兩役所存被尋下候且准后御同居可被爲在但親王宣下後之頃迄御同居花御殿へ被爲移候御日限追而被仰出一位以下一統無所存恐悅之旨申入於無所存者勅問人々可被問所存候小御所下段相構可申上旨被命

六月二十日熙宮御繼體之事御內慮將軍家勅答到來之由所司代申越候ニ付明日所司代參上之儀武傳被命置中略明日所司代參上殿下御面會御場所先例帝鑑間代被用小御所下段歟當時御修覆中之間以麝香間端休息所事也被用帝鑑間代旨武傳被咄候間番頭代周防心得申渡

二十一日於帝鑑間代端休息所殿下御面會所司代參進之儀

先早且非藏人番頭見繕任先例南方障子開置番頭代武傳へ相尋東方障子閉之隨殿下御命武傳卿誘引入ヒヨトリノ杉戸有内見歟尋殿下武傳被申案内經役所前廊下向端休息所給殿上人行遠朝臣相從至端休息所開東方障子殿下御座定則閉障子垂筵邊在便宜所松平伊豆守參進申勅答了退後行遠朝臣開障子殿下經本路歸八景畫間給此後所司代退于口向殿下參御前給小時以兒召兩役武傳令非藏人告之但武傳計召之時者兒直向被告之兩役一緒時如此御小座敷兩座○兩座は議奏傳奏の對座を謂ふ如例殿下有御傍武傳參端座當役參奥座如例先伺天氣次殿下被傳仰曰

熙宮追々御成長ニ付儲君御治定准后御養子御實子御同樣之思召來八九月之間立親王可被宣下御治定候飛香舍へ被爲成候儀者追而可被仰出候

一統申恐悅又被傳仰曰左大臣以下於御學問所如先例御對面且可被仰下其心得可被申入置者直自下臈退了中略先命御學問所奉行左京大夫設御座如節朔中段也中略出御一統平伏先以兒召關白殿關白殿參進在端座次殿下被伺天氣氣色于當番當番聊進出稱唯卽退召右大臣以下如朔日復座右大臣以下至九條中將參端座被伺天氣之後殿下有氣色當番卿起

座於御眼路邊膝行入中段對右大臣被傳仰曰熙宮
追々御成長ニ付被定儲君尤准后御養子御實子御
同樣之思召來八九月之間立親王可被宣下御治定
候各被申恐悅之由（中略）次傳仰兵部卿宮上野宮上總
宮尹宮等之事專如前（親王如例奥座云々）次傳仰久我前內大
臣廣幡前內大臣等之事同上（端座也）次召院兩役右兵
衛督宰相中將前源宰相刑部卿等入雁間參進下段
拜天顏（如御酒宴時）次依殿下氣色當番起座至右兵衛督
前被傳仰曰（同上）了復座次右兵衛督以下自下藹退次
殿下經本路退給次入御（下略）

〔隆光卿記〕六月廿一日己酉熙宮（御年五御母儀權典侍正親町故前大納言實光女）儲君御治定云々關白以下親王丞相悉參集奉
賀給云々當番言知卿以廻文示條々
熙宮追々御成長自今日被定儲君來八九月之間
立親王宣下御治定尤准后御方御養子御實子御
同樣被仰出候事
熙宮自今日被稱儲君候事
御次第可爲准后御方御次事
儲君へ言上之儀於禁中言上可然之事
今明日中御所御所准后御方儲君等へ參賀可然
事
右兩役列座議奏第一大宮權大夫（實萬）近習第一新源

大納言（基豐）院祗候第一右大將（家厚）内々同權大納言（輝弘）
外樣四條中納言（隆生）召設被申渡又儲君三卿右衞門
督（言知）園中納言（基茂）葉室中納言（顯孝）等へ被仰云々

〔顯孝卿記〕六月廿一日午刻參内（中略）未下刻依議奏卿
招右衞門督（言知卿）園中納言（基茂卿）予等到八景繪間兩
役列座議奏第一皇太后宮權大夫（實萬卿）被演舌云熙
宮今日儲君御治定被仰出之間三人則三卿被仰下
云々（中略）儲君自今御三間（○常御殿の西南に在り）可爲御座之旨
議奏卿被示之

〔御内儀日記〕六月廿一日熙宮ゐゑ機嫌よし御所よ
り長橋ゑゑ參りにてけふはゑゑ日柄よく准后ゐゑ御

養子御繼體儲君御治定立親王宣下八月九月中と
仰出されゑゑ事仰られ直に奥へ成せられゑゑ禮仰
入られゑゑ地黑めさせられゑゑ禮仰入られゑゑ口祝
ゑゑ吸物ゑゑ重さかなゑゑ盃ゑゑ戴遊はしゑゑ
儲君ゐゑ直に今日よりゑゑたゝゐゑ（○御嫡母を指し奉る稱）へゑゑ引
取あそはしゑゑ事なから宮ゐゑ御殿ゑゑ修ふく今少
しゑゑ出來なきゆへゑゑ暫らくの所今日よりゑゑ三間
へ成らせられゑゑたゝゐゑより上らふかはるゝゝに（腐）
今日より進せられゑゑ（中略）内侍所へ儲君ゐゑ機嫌よ
く萬事ゑゑするゝゝの樣にとゑゑたゝゐゑよりゑゑ鈴を
上られゑゑくま（○御供米なり）參りゑゑ由にて進せられゑゑ

使おまきゐれう人長橋殿へゐ渡し申されゝ

〔按〕議奏御用之記に見えたる御繼體御内慮將軍家勅答云々の事は蓋公武間舊來の成規にして儲君の事を始め奉り諸王の御養子御猶子親王宣下等及關白大臣武家傳奏の任職に至るまて先つ幕府に御内慮を示し其奉命を得て後之を宣するを例とす若幕府之を奉ぜされは叡慮と雖とも施行し給ふこと能はさりき但御内慮の事は文久二年十二月十六日に至りて幕府之を辭す其條參看すへし

七月二十二日庚子飛香舍に移らせ給ふ

〔議奏御用之記〕七月十七日乙亥文化度儲君飛香舍御引移以前鳴弦之事白川へ被仰付候ニ付今度御時宜殿下被伺候處文化度トハ少々御時宜違候哉ト思召候得共清祓ニテモ可被仰付哉可伺旨殿下被命併夫モ不被仰付哉伺之旨以伊豫申入良久追御返答之旨被申出（原記御返答を載されとも其事御内儀日記に見ゆ）

〔御内儀日記〕七月廿二日今朝辰刻若宮御殿ゐ清はらひ吉田殿參られ同半刻ゐする〳〵相濟（中略）ゐ吉刻過午刻御所へゐ禮に成せられ（ゐひちゝみゐもやうめし）ゐ口祝ゐ戴夫より直にゐたゝゐへゐ引移りゐ供大すけ殿長橋殿ゐ下たちなり（下略）

二十六日甲申彈正大弼平行弘石井右大辨菅原聰長東坊城

右近衛權少將藤原能通六角侍從藤原公前姉小路藤原胤

保廣橋を儲君祗候と爲す

〔聰長卿記〕七月廿六日甲申從議奏觸狀到來如左

御用之儀候間巳刻御參可被成候也

七月廿六日〇下に議奏の名を署せさるは召狀の流例なり

石井彈正大弼殿

東坊城右大辨殿

六角少將殿

姉小路侍從殿

廣橋侍從殿

右加承之後返與于仕丁巳刻參內當直且依召也弼

三位以下參集之後大宮權大夫被示云儲君祗候被

仰出之旨也謹御請申上

〔按〕儲君祗候立親王以後親王祗候と曰ひ立坊

以後東宮近習と曰ふ其命免前後數回に及ふ

茲に初出の一例を擧て後皆之を略す

孝明天皇紀卷二

天保六年乙未九月十八日甲辰立親王宣下御名を統仁と稱す權大納言源基豐廣幡を以て勅別當と爲し家司以下の職員を補す

〔立親王雜記〕後七月五日立親王宣下日時勘文賜御點可清書以榮丸被仰出頭辨申渡小時清書被附

擇申　親王　宣下日時

九月十八日甲辰　時巳

天保六年後七月五日　陰陽頭安倍朝臣晴親

九月八日御名字勘文幷訓書關白殿以下勅問今日及入夜明日御德日依之明後十日正房可申渡來十

四日可有勅答同可申渡於御前建房奉仰卽御名字
勘文并訓書等賜之
十四日各勅答頭辨被附以榮丸上
十八日親王御名字宸筆（大高檀紙竪）被出之
統仁
御別紙奉書（四折）
統仁（於佐比登）
頭辨授之陣儀可始申渡後刻陣儀濟由奉行言上（中略）
宸筆之御名字奉行任例拜領顧申以榮丸申上可賜
被仰出申渡
〔菅葉〕閏七月九日丙申壬生故前宰相末男福麿所勞
及危篤之旨告來依之俄當番不參且以右大辨（東坊城）○
儲君御名字勘進之事依所勞御斷申上且內勘文（聽長）
申下之儀申上之處後刻自右大辨右御斷被聞召內
勘文被返下之由被傳右御名字統仁叶叡慮歟訓數
多可勘進旨一昨日被仰下今日可獻上覺悟之處右
之次第無據申御斷殘懷不過之者也
十二日己亥自右大辨（聽長）書中到來儲君御名字勘進
被仰出之旨風聽
十三日庚子右大辨談話之次云昨日議奏大宮權大
夫儲君御名字勘進之儀被申渡之後殿下御面會過
日予勘進之內統仁之字引文亦佳旁以兩御所叶思

食御治定一段之處ニテ予申御斷之間今度勘進之
内右之字可加載但牟禰之訓與鳥羽院同是亦强雖
無御構鳥羽院ハ人々彼是申上候帝之事故也他訓
可有勘進御噂云々今度雖被改勘者於被用統仁ハ
深可大慶者也

八月十一日丁卯右大辨今日儲君御名字勘文被獻
上旨也仍内勘文以下記于今日置了

内勘文如左（調様料紙等一如去七月廿六日爲定獻上○原記七月廿六日の内勘文は略す）

統仁（伊止比登　於佐比登）　切縝
謙仁（幾與比登）　切鬟
克仁（萬幾比登）　切鬟
里仁（牟良比登）　切隣
春仁（佐幾比登）　切縝
脩仁（於佐比登）　切申
貴仁（牟知比登）　切巾
詠仁（宇太比登）　切無形
純仁（須美比登）　切辰
履仁（布美比登）　切鄰

右大辨菅原聰長上

統仁

廣韻曰仁如鄰切禮記曰仁者人也

廣韻曰統他綜切紀也韻會曰攝理也

周易曰大哉乾元萬物資始乃統天

文選曰統天仁風遐揚

謙仁

集韻曰謙簷簟切安靜貌

周易曰謙尊而光

東觀漢紀曰聖表有異壯而仁明謙恕

克仁

廣韻曰克簷得切說文註曰任也

尚書曰克寬克仁彰信兆民

里仁

廣韻曰里良已切爾雅曰邑也

論語曰子曰里仁爲美擇不處仁焉得知

春仁

廣韻曰春昌脣切爾雅曰發生也

管子曰春仁夏忠

脩仁

廣韻曰脩息流切尚書疏曰脩治也

孔子家語曰取人以身脩道以仁

貴仁

廣韻曰貴居胃切尊也

後漢書曰治貴仁平

詠仁

廣韻曰詠爲命切歌也

文選曰下舞上歌踏德詠仁

純仁

廣韻曰純常倫切周易曰純粹精也

文選曰聖主冠道德履純仁

履仁

廣韻曰履力几切踐也

鹽鐵論曰尊天敬地履德行仁

聰長 上

勘文今日被附于奉行頭辨正房朝臣其樣以中鷹檀紙（備中國所出）一枚竪書之以同紙一枚爲禮紙以同紙一枚爲表包無上書

勘申

御名字事

統仁

廣韻曰統他綜切韻會曰攝理也

廣韻曰仁如鄰切禮記曰仁者人也

周易曰大哉乾元萬物資始乃統天

文選曰統天仁風遐揚

謙仁

集韻曰謙箝簟切安靜貌

周易曰謙尊而光

東觀漢紀曰聖表有異壯而仁明謙恕

克仁

廣韻曰克善得切說文註曰任也

尚書曰克寬克仁彰信兆民

右勘申如件

天保六年八月十一日

正三位行右大辨兼勘解由長官菅原朝臣聰長

別訓切屬于議奏衆被獻上其樣以中鷹（與勘文同紙）一枚

（横三折）書之以同紙爲表包

統仁（於佐比登）切縝

謙仁（幾與比登）切繫

克仁（萬幾比登）切繫

右大辨菅原聰長

九月十八日甲辰終日快晴如春日今日儲君親王宣下也（中略）入夜自新宰相廻文到來

親王御諱統仁（於佐）右之通御治定之旨大宮權大夫被申渡（中略）儲君御次第是迄准后之御次候處自今儲君准后右之通御次第候且儲君へ言上之儀是迄之通可相心得旨大宮權大夫被申渡（下略）

〔御内儀日記〕後七月五日准后ゐへ長橋局ゟ使にて立親王宣下來る九月十八日巳刻ゟ勘文ゟ拜領ゟたゝゐより ゟ傳へ進ぜられゟ返答はゟたゝゐよ

り仰進ぜられト

九月十三日御所より儲君ゐ立親王宣下をするするの揚今日より〻日柄宜敷故内侍所へ一七ゟ日〻祈禱仰出されめてたくゝくま參る長橋辰〻持參（○明日以後准后大宮仙洞より内侍所へ御鈴云々の記事あり今略す）

十八日立親王宣下朝よりめしかへ〻緋りんす〻服なり〻深曾木も未た故〻髪〻常の〻通り〻ふり分髪にて〻ちてゐにて〻よし〳〵との〻事なり立親王宣下に付（こはくこ三荷三種此内一種生鯛なり二荷）上られ大鷹立目錄添ふ〻使高松辰（中略）御所より長橋辰〻使（真御太刀來國長一箱鶴一羽御馬代金三枚二種二荷）〻口上高松辰〻返答〻

直に仰進ぜられ（中略）午刻表參役御方〻參集たか司關白ゐ左大將ゐ〻内儀へ〻參りにて何かと〻せゝ〻申入同半刻〻作法〻する〳〵濟ぜられ（御作法の御時分高松辰〻ちきはかまなり）關白ゐ〻始一統恐悦申入親王ゐ御所へ〻禮に成ぜられ〻盃〻拜領未刻頃〻内〻出御成ぜられ中段にて（こはくこ〻吸もの）〻祝出親王ゐ准后ゐも〻同揚〻祝出（御名字御末廣二生たい一折）〻拜領あらせられト（中略）宮ゐ〻殿今日より上段〻疊〻板しとね敷されて〻んの〻盃あらせられト〻陪せむ長橋辰〻手長〻乳人（○原記中のコハクゴは強供御なり強飯をいふ）

立親王宣下次第

先諸卿著仗座

次上卿移著端座

次上卿令官人敷軾

次職事著軾下御名字

次上卿披見結申職事仰可爲今上親王之由

次上卿令官人召辨賜御名字（大辨候者召大辨給之）仰可爲親王可作官符之由辨退去仰史令成官符宣旨

次職事著軾仰以其人可爲今上親王勅別當之由

次上卿召辨仰其人今上親王勅別當事（其人在座者上卿示之而後更召辨仰之）

次上卿令官人撤軾

次諸卿起座

次親族拜（近代不論親疎各列立）上卿以下進弓場拜舞（以頭藏人爲申次）終退出勅別當殘留更令職事奏別當慶拜舞退出

次上卿引率諸卿參本宮著對代座（奥端相分）勅別當留立中門外申慶再拜（以可補家司若職事之人爲申次）訖加著對代座端

次勅別當依召參進寢殿簾下給家司職事藏人侍者御監等夾名（書折紙二通女房從簾下出之）復座

次別當召家司上藺一人賜家司御監等折紙

次召職事上藺一人賜職事藏人侍者等折紙

次家司以下列立中門外申慶賀申次離列申事由加
立列各二拜
次上卿以下退出
〔基豐公記〕九月十八日天晴今日立親王宣下也予參
仕兼日奉仰辰刻著束帶（中略）冠袍（フトワノ輪無當家納言之後用之）蘇
芳下襲同裾表袴（藤九）紅大口紅單金作蒔繪劍紺地緒
無文玉帶帖（檀紙白）夏扇襪（練貫）淺沓乘車（檳榔毛車代蘇芳簾同濃下簾）
路頭行粧（○行列略）於陽明門代下車褰簾（義集元頼役之）沓（元役之）經
置路（前駈以下相從置路北）入建春門從諸大夫間參內々方先
參仕之事居奉行（中略）巳刻許陣之儀被始之旨奉行正
房朝臣（○萬里小路）告人々小時先右大臣尙忠（○九條）降殿
相續諸卿各降殿先奉行藏人頭正房朝臣於鬼間御
名字執筆云々（六位藏人硯紙役送云々）
右大臣入和德門經恭禮（○青瑣敷）宣仁等門著仗座（奥）次
權大納言輝弘（○醍醐）入同門著陣（奥入宣仁門時有請益）次予（○廣
幡大納言）經同門著陣（奥依有上首無請益）其儀一揖脫沓突左膝昇
著座一揖縫裾次源中納言建通（○久我）右衛門督言知
（○山科）著座次宮內卿定肖（○梅小路）左兵衛督雅久（○飛鳥井）著
橫敷座各入同門人々著了右大臣起座移著端座（上卿）
（動座之時兩宰相致禮拔足乍居磬折）次上卿召官人（二音不受氣色但參進不審）令
敷軾（仰詞軾）官人退去持參軾敷上卿座下方（如例）此便仰
沓之事（其詞ク〻ッ）次奉行職事頭左中辨正房朝臣來軾御

名字折紙置上卿座前（鷹檀紙竪物）上卿披見職事仰詞（其詞親王トセヨ）退入次上卿召官人（如前）令召右中辨光暉朝臣（○日野西）官人於床子座傳彼辨辨直參進著軾上卿下御名字折紙辨披見結申上卿仰詞（如職事）辨退入仰史令成官符宣旨此間奉行職事著軾仰以其人可爲親王勅別當之由退入（其詞以權大納言源朝臣親王ノ勅別當トセヨ）次上卿向予方仰勅別當之事（其詞權大納言源朝臣親王勅別當タリ）予逃座下足乍居磬折奉仰了如元直足次上卿召官人（如前）召右中辨官人退傳彼辨辨直參進著軾上卿仰詞（其詞權大納言源朝臣親王勅別當トセヨ）辨退入仰史次上卿召官人（如前）仰可撤軾由（其詞膝突撤セヨ）直撤之次親族拜（近代不論親疎各列立）先上卿起座經宜陽殿壇上出軒廊西二間經階下立弓場（無名門前）次權大納言起座經同路立（上卿次）次予一揖起座經諸卿座後（裾踏スクヒ越ユク）突左膝著沓（先右）右廻（官人直沓裾後ヘヒ）立向一揖南行經宜陽殿壇上入軒廊出西二間經階下（階下之間裾取手召使奉仕了）弓場立定（權大納言次依假立無揖）裾後引（召使裾引直人々如此）次源中納言右衞門督宮內卿左兵衞督等各起座列立次頭辨降小板敷經無名門立上卿前上卿申事由一揖頭辨答揖退去奏聞畢復命之後上卿以下少進出拜舞先二拜置笏地立（左右左）次居（左右左）了取笏一拜（乍居）立二拜（每度突左膝起時右）各同時拜舞了上卿離列經本路出和德門令參本宮給次權大納言（同上卿）次

源黄門離列經御後幷和德門次右衞門督可經御後之氣色予密々告云本路可然歟當時陽明多被用本路尤今度內府尊慮所也依同流密々申了經本路出和德門次宮內卿左兵衞督等同源中納言御後各上卿相續參本宮當時依無路出建春門參本宮先內々方參集予留立各離列了少進寄立無名門前同上卿頭辨出逢予一揖申別當慶頭辨答揖退去奏了復命一揖予答揖彼辨退入次予少進出拜舞如前儀事了左廻經本路出和德門階前後召使裾奉仕同前建春門等於陽明門外乘車當時依路如是無參本宮於大門外下車簾沓役義集元賴先參內々方車寄昇降屆奉行正房朝臣候休所家司以下輩各參集于時午刻午半刻許被始之旨奉行被告示上卿以下降殿經中門著對代座先

上卿著端座次權大納言奥次源中納言奥次右衞門督端奥座人依座後狹少前著端座人後著上次宮內卿奥次左兵衞督端奥座人依座後狹少前著端座人後著上卿以下著座之後家司能通朝臣○六角著殿上人座奥參人々依所狹少便所群居云々諸卿各著了頃予降殿立中門外諸大夫長等候後方能通朝臣出逢立予前予一揖申別當慶能通朝臣答揖退入不撤劍笏經簀子參進于御座簾下申事由復命一揖予答揖能通朝臣退入予少進出二拜突左膝起時右了入中門經屏幔北長直裾至沓脫下一揖脫沓右昇沓脫於簀子敷繆裾從座後懸膝左著座一揖安座繆裾後方次能通朝臣經簀子參進簾下召別當直退入予座上來簀子告可召之由予逃足座下承伏復座更逃足起

座（左廻）降簀子参進（曲折居綽裾）簾下候簀子（不揖不安座作下裾）此時女房（親王上﨟歟可尋）少褰簾家司御監職事藏人侍者等出折紙二通（中廉紙三折）予先笏懷中少進寄取件折紙二通（雨手）直懷中取笏少逆退經本路復座召家司能通朝臣（目召豫候簀子）直参進（座下簀子）予先置笏（右方）次以右手出件折紙披見（家司御監等交名）少斜向取直賜家司家司懷中退去次召職事實豐（如家司）直参進賜折紙一紙（職事藏人侍者等交名）退去（一如初家司人々廻覽之後於便所見御監云々職事藏人侍者同斷云々）次家司以下降沓脫列立中門外（北上東面）公前朝臣（第二家司）離列立能通朝臣前家司申事由公前朝臣（爲申次）入中門昇沓脫（劍笏）不解参進御座簾下復命之後初列立加人々再拜了次

第昇殿（經本路便宜所）次右大臣以下起座退出（各經本路爲先下﨟）予殘留各退出了白地起座（經座上入內々方）此後親王覽宣旨先能通朝臣著座官務候簀子能通朝臣目召史奉宣旨（乍筥）彼朝臣取筥經簀子從簾下附于女房（乍筥）御覽了返空筥賜（留文）能通朝臣取空筥復座召史返空筥史退出事了予更從內々方復座（依白地起座前後無揖）職事覽令旨其儀予居向（西面）氣色職事（豫候簀子）直参進覽令旨（入筥）置予前（從座下簀子）退去（令旨職事於里亭豫書設云々）次持参侍者硯置座傍（右方從簀子）退去次予先置笏（左方）少寄筥（左方）次引寄硯先入水鰭袖ヲ加テ取墨の文字ニ摺之（三度スリ）摺口ヲミル摺了墨硯ノフチニヲク次取筆染墨二管ナカラ

也見毛先染墨置柳葉上次取出令旨一通置前披懸紙上下下上如例
文取上披見了左ノ手ニ取渡シテ始染タル筆ヲト
リテ加署文披見畢文二重ニ表ノ方ヘ押ヲリ輪ナルル方ヲ更表ヘ押合テ左ノ手ニ渡シ文ヲ
ウツブケテ脇ニフセテ取筆書名二字書了筆ヲ置キ文如元巻了入筥
ウツブケテ更染筆次取出一通文加署了次第初文ノ上ニ重チクテチク
也如初各加署了墨如元ナヲシヲク次令旨筥座前
ニヨス家司一通御監一通職事一通藏人一通侍者一通合五通次第重置次取笏目
侍者ニ豫ア簪子リ侍者參進直撤硯次召家司目計參進能通
朝臣ニ豫ア簪子リ來座下簀子予渡笏左手取出令旨二通
家司御監一度下家司文ウツブケテ押遣能通朝臣取文直退去於便
所次第廻覽云々御監於便所賜一通云々次召職事目計參進實豐ニ豫ア簪子リ

來座下簀子予渡笏左手乍筥押下令旨三通職事藏人侍者
實豐取筥退去於便所藏人侍者等傳云々次予如元居直南面逃足一
揖右廻降簀子到階下跪著沓下立一揖右廻經屏幔
北出中門退出下略
〔按〕基豐公記に勅別當宣旨寫及家司等補職の
令旨寫を載たれとも今皆略す其名は次條に
見ゆ
〔實久卿記〕九月十八日甲辰今日今上親王宣下也中略
參仕公卿奉行正房朝臣
大臣尚忠大納言輝弘基豐中納言建通言知參議定省雅久
勅別當

新源大納言 基豐

家司 ○下の稱號は編者の注

能通朝臣 六角 公前朝臣 姉小路 延房朝臣 池尻

言成朝臣 山科 定德 梅小路

職事

實豐 風早 國典 芝山

藏人

大江俊迪 北小路 大江俊常 北小路

侍者

小槻輔世 壬生

御監

平清德 粟津

〔久我家記〕九月十八日 上略 上卿下殿相繼輝弘卿以下

下殿上卿右大臣尙忠公入和德門經靑瑣宣仁等門

著陣 先著奥座 次權大納言以下入同門著陣

其儀入宣仁門 傍南右足 先 參議座末程一揖脫左沓懸

左膝跪右沓踏立立揚西行至第三間著座一揖逃

右足畢安座繆下襲尻刷衣袖直平緒垂次第著座

了

次上卿移著端座次令官人敷軾

其儀正笏召官人 二音 官人來之時仰云ヒサツキ官

人退持參軾敷之此次仰云沓直セ

次職事正房朝臣著軾下御名字

次上卿披見結申頭辨仰可爲今上親王由

次上卿令官人召辨右中辨光暉朝臣著軾上卿賜御名字仰可爲親王可作官符之由辨退去仰史令成官符宣旨

次頭左中辨著軾仰云權大納言源朝臣ヲ以テ爲ニ親王別當

次上卿令上親王勅別當之事仰其人

其儀基豐卿在座之間向彼方被目基豐卿逃足正笏ノマヽニ深一揖

次上卿令官人召辨光暉朝臣著軾仰其人可爲今上親王勅別當之由

次上卿令官人撤軾

次諸卿起座（上﨟爲先）其儀上卿一揖起座

次權大納言次新源大納言次予

其儀先逃足一揖起座跪著沓向座方一揖經宜陽殿壇上軒廊西行南面降石階（曲折繆裾）召使兼而候此邊取裾經南殿階下於橘木乾角下裾向于弓場列立不揖不繆裾次第列立（北上西面大臣以下一列）頭左中辨正房朝臣出逢上卿奏事之由一揖（上卿計一揖諸卿不揖）職事答揖奏聞了職事歸出告聞食之由上卿答揖了次上卿以下拜舞（是則親族拜也）

其儀先二拜置笏地上起左右左了居左右左了

取笏一揖二拜了

次上卿以下離列參于本宮

其儀上卿一揖經本路退出權大納言右衛門督等

同上予宮內卿左兵衛督等經南殿御後從和德門

退出中略次予經建春門於陽明門代乘車參入于本

宮中略平常參入之御門前ニテ下車從尋常御車寄

參入于內々方於便宜方御祝酒拜受小時參役之

人各被參直參役一統親王准后御方等へ以表使

恐悅申上小時式被始從奉行被告

上卿以下下殿從中門參進先上卿次權大納言次

予於中門外下裾中門內仲襄役沓參進三之階之從中之

階昇降於階下一揖昇一階脫沓於簀子繖裾突左膝

西行亦繖裾南折亦繖裾突左膝著奧座

其儀權大納言被著座之後予參進從座前居廻

著之北面一揖逃左足次繖裾直平緒垂

次右衛門督以下至參議各著座了

上卿端權大納言奧新源大納言端予奧右衛門督

端宮內卿奧左兵衛督端端之人從座後著座也奧

之人從座前著之

次勅別當留立中門外申慶再拜申次能通朝臣

別當拜作法不見訖加著對代座端

次勅別當（基豐卿）依召參進寢殿（能通朝臣被告之）於簾下給家司職事藏人侍者御監等交名（書折紙二通女房從簾下被出之作法不見）復座

次基豐卿召家司上﨟一人（能通朝臣）賜家司御監等折紙（基豐卿折紙懷中取出之先披見給之）

次別當召職事上﨟一人（風早越後權介）賜職事藏人侍者等折紙（作法同上）

次家司以下列立中門外申慶賀申次離列申事由加立列（申次公前朝臣）各二拜（作法不見）

次上卿以下退出（爲先下﨟）其儀如進儀於階下歸向一揖出中門外（仲襄役沓）即刻參內予於瑞垣外下車

其儀下車入唐門從尋常車寄參內（依當番也）候番衆所以兒歸參之儀言上聞食之儀有御返答（下略）

〔能通卿記〕後七月七日甲午（上略）參內屆于頭辨暫而被招儲君家司御內意被仰出旨被傳宣畏御請申上九月十七日因本宮內見家司職事各參集明日所役之事各所存無之仍治定次第注于右（○原記次第を十三日の條に載たり今此に移す）

本宮儀

先上卿以下著對代座勅別當留中門外

次（能通）著殿上人座（端帶劍把笏）

次別當申慶申次（能通）起座降沓脫出逢參寢殿（御座之北間東面北之方）屬女房申事由還出復命訖昇沓脫候便宜所

次別當再拜訖加著對代座（端）

次（能通）參寢殿奉仰別當座上（從簀子）告召成之由退去

次別當參寢殿給家司職事藏人侍者御監等夾名（書折紙二通女房自簾下出之）復座

次（能通）豫候簀子

次別當召家司（能通）候簀子給家司御監等折紙（置笏）（長押掛膝取之懷中）退去（於便宜所披見回覽等訖於北之簀子坤方召御監〔豫候中門內〕定）

（德令爲見訖留之）

次別當召職事實豐給職事藏人侍者等折紙（一進退如）

（能通於便宜所披見回覽）

次家司以下降沓脫列立中門外（一列北上東面）申慶賀申

次公前朝臣離列出逢參寢殿申事由還出復命

訖加列各二拜昇沓脫候便宜所

次諸卿退出

次（能通）著殿上人座（奧）左大史以寧持參宣旨（入筥）候

簀子目史昇長押置筥於前退候持參於寢殿屬

女房覽之留文返給空筥取之復座召史返之史

取空筥退去訖起座候便宜所

次別當著座（端）

次職事覽家司以下之令旨（入宮）置座職事退入

次侍者持參硯

次勅別當加署

次侍者撤硯

次勅別當召家司給家司御監等令旨取之退入（侍者）

（撤硯後豫候簀子召家司能通給家司令旨一通御監令旨一通以上二通置笏長押掛膝取之于笏取副退入於便宜所披見廻覽訖留之御監令旨定德被傳之）

次勅別當召職事實豐給職事藏人侍者等令旨（乍入）

（筥給之）取之退出（一進退如能通藏人侍者等令旨被傳）

次勅別當退出

十八日立親王宣下（中略）巳刻著束帶（衣紋基垂纓掛政朝臣）冠（紙捻）

引鬢幅（○引は引出すの略能通右近衛權少將たり故に之を爲す）縫腋袍二藍下襲紅單馬腦丸鞆帶蒔繪劍紫綾平緒表袴大口襪帖紙夏扇笏召具隨身二人（冠老懸卷纓褐衣赤單朽葉袴太刀弓箭）白丁二人（內一人持傘）參本宮（帶劍把笏）候內々方（中略）上卿以下參上候內々方暫著對代座次予著殿上人座自餘朝臣各雖可著此座依狹少候便宜所（○原記此次に雜事數條あり今略して官符宣旨の二通を錄す）

太政官符（中務省）

統仁親王

右從一位行右大臣藤原朝臣宣奉

勅令上親王所定如件省宜承知

依宣行之符到奉行

正四位上右中辨藤原朝臣判

修理東大寺大佛長官正四位下行治部權大輔主殿頭兼左大史小槻宿禰判奉

天保六年九月十八日（○官符の原文は辨と史の署名を一行に書す今割て二行とす下の署名も亦日の下に接す今上文の例に倣ふ）

統仁

右中辨藤原朝臣光暉傳宣

右大臣藤原朝臣宣奉

勅宜爲今上親王者

天保六年九月十八日

修理東大寺大佛長官治部權大輔主殿頭兼左大史小槻宿禰以寧奉

（壬生輔世記）九月十八日儲君立親王宣下也（中略）著束帶辰一點參內（雜色二人白丁二人沓傘）巳刻過陣被始奉行頭辨正房朝臣御名字執筆硯予令役送其儀如左

先正房朝臣參進於鬼間（引裾）西向座（不設座）次予參進於簀子請氣色出於殿上執硯紙等持參於鬼間（以前仰出納令設硯料紙以前自奉行被渡仰出納令八折但硯筆等右之方料紙左之方置畢候元處）次硯作法（如常）自懷中執出御名字（宸翰）置於硯之左方次四折（○恐くは八折の誤）料紙執筆畢如元卷之懷中宸翰御名字如元卷之同懷中次予へ氣色參進執硯出於殿上返出納（進退不引裾長押不懸膝）次正房朝臣起座向陣予

相從同向陣（不引裾自女官階降）

陣御裝束如例殿上敷設如例中殿不設御調度格子

鬼之間臺盤所（南方一枚）御手水之間割格子上之（○輔世は當時六位藏人なり）

〔按〕久我家記所載達書の略に當日參賀獻物之事可爲文化度之通御所御所准后等へ生肴一折宛親王へ公卿太刀一腰馬一匹（代金百疋）殿上人太刀一腰人別ニ可獻且獻物使衣體布衣雜色之類可任先格尤重服者不及獻物翌日參賀可然之旨云々ヒ見えたり

〔備考〕

〔顯孝卿記〕九月十七日亥刻許右府公賜使明日於准后儲君へ恐悅以御肝煎卿可被申之所唯今自關白殿令申給云文化之度ハ中宮也於此度ハ爲准后君臣之儀異其儀仍於禁中以三卿令申給歟若參會於無之ハ以議奏卿令申給云々示給報承知了

〔隆光卿記〕九月十八日儲君親王御名字統仁御治定依之資統（○日野侍從後改名資宗）改名歟狀父前亞相（資愛書剛紙以消息）附屬職事獻之直ニ被聞食（中略）統ノ字親王ニ減畫ノ本文未無所見改名ノ位重キ事減畫不致事モ如何ト末畫ヲ省キ紵ニ書付モ餘リ目立候間遐ト書ノ類例ニテ統トヽノ點ヲ省キ被書付候旨全雖今案敬ハ

深キ方ニ相從方哉ト如此被認云々（欵狀寫略す）

十月四日己未 嘉糯宮逝去因て三日物音を停む

〔外様言渡〕十月四日嘉糯宮御違例不被爲勝處今日逝去ニ付禁中洞中儲君等自今日三箇日被止物音禁中洞中兩三日中可伺御機嫌之旨按察前大納言被申渡（下略）

〔儲君御乳人記〕十月四日かたの宮ゟ違例の所ゟすくれ遊し申さす酉刻御寺御所（○比丘尼御所の一大聖寺）へゟ下りあろはしゝよし戌刻ゟ養生かなひまいらせられす逝去成まいらせられゝ右に付今日より三ゟ日間物音をとゝめられゝゟ慎みには及ひま

いらせられすと長橋ゟ申なり

〔按〕嘉糯宮は光格天皇第八皇子（御母菖蒲小路聰子）天保四年四月廿八日降誕（御產所姉小路家）是日逝去（御年三）今月十六日相國寺中長得院に葬り相嚴身院宮と號す（執次詰所記に據る）

十五日庚午 大將軍德川家齊等親王宣下を賀して物を獻り供御料を貢す

〔御内儀日記〕十月十五日立親王宣下恐悦東使參上織田大藏大輔ゟ口上傳奏ゟ承りの由ゟ返答は追てとゝ申の由大樹公より（白かね二百枚三種二荷）内府公より（白銀百枚二種一荷）大納言ゟ方より（白かね五拾枚一種一荷）ゟ臺所ゟ方

より（ちりめん十卷一種）を簾中を方より（紗綾十卷一種）右の通進上たつ目録書添年々千俵進上奉書諸司代より參りゝ由なり

十七日關東より此度を祝進上物に付女房奉書二通大すけ殿を認めの由長橋殿を持參表使より山科大納言殿へ渡す

廿四日此度恐悦ニ付獻上物を配り（伊勢兩宮上御靈八幡多賀南都兩社）金百匹つゝを序の節に上る此外宮々かた御所御所女房隱居れもて口向附武家を附組與力同心へもこな〳〵下されれ

〔實久卿記〕十月十五日庚午關東大樹以下儲君親王宣下恭賀被申上名代織田侍從信恭（高家）參内

十二月二十五日己卯御髮上

〔儲君御乳人記〕十二月廿五日をくし上を吉刻卯飛香舍を庭にて を用掛りとり次つとめゝ辰刻過するすると相濟ゝ

〔備考〕

〔小佐治光文雜記〕天保八年十二月廿六日御髮揚也辰刻前掛り兩人（○勢多大判事小佐治石見守）熨斗目（○庶士禮服中の一）著用御髮（入生絹袋勘文添）御文匣入表使ヲ以被出花御殿東庭へ仕丁頭（カシラ）修理職下仕丁三人（白丁著）召連相廻燒火奉揚無御滯相濟勘文返上

十二年正月廿三日幸德井依召參上之處御髮上日時勘進被仰付

御髮上日時

今月廿五日辛亥　時卯

御吉方巳與午之間

右ニ付文化度東宮樣ヨリ（立坊の後を謂ふ）表ニ相成候旨此度モ御同樣ニ相成候哉以表使伺候處明日御治定表へ被仰出候段御申出有之（下略）

〔按〕御髮上は年中御梳髮の御脫毛幷に御元結等を燒棄るを謂ふ踐祚より後の例は則當時年中行事に十二月廿五日御髮上日限被申出極蔔觸示當日以得選被出藏人內侍所前庭奉仕之事とあり又議奏記錄文久元年十二月廿五日の條に御髮上差次藏人參仕屆以表使申入少時以得選被出（勘文絹袋）等載御文匣蓋手燭相添於菊衝立邊授之差次申渡後時奉仕了御文匣蓋絹袋手燭等返上云々と見ゆ所謂手燭は之に用ふる淸火なり

七年丙辰三月五日戊子節仁親王（桂）薨す因て三日物音を停む

〔隆光卿記〕三月三日丙戌後聞幹宮桂家御相續御治定昨年來御違例之處今晚以外御增氣之間令退出于桂家云々內密於省裡令及御大事給

四日丁亥幹宮爲御養生令退出于桂家云々

五日戊子幹宮今夜薨去之間自今日三个日被仰廢朝院大宮親王等被止物音

〔按〕節仁親王は仁孝天皇第六皇子（御母權典侍雅子）天保四年十一月朔日降誕（御產所正親町家）幹宮（ミヤ）と稱す六年六月桂家御相續今年三月五日親王宣下即日薨ず（御年四）同月廿七日相國寺中慈照院に葬り如意寶院宮と號す（執次詰所記に據る）

八年丁酉十月二十六日庚午飛香舍より花御殿に移らせ給ふ

〔御内儀日記〕十月十六日親王ゐ今日より花御殿へ

ゐ引移りに付御所より（ゐよせ）准后ゐより（同着一折）進（同斷）せられけ

廿六日親王ゐ今日ゐ日からよく花の御殿へれも

て向ゐ引移りあらせられ（下略）

〔言渡〕十月十六日明日親王御方可令移于花御殿給

被仰出候旨以伊豫被申出後刻明日依御德日今日

被爲移旨更以伊豫被仰出

十七日陰陽頭（土御門晴親）○參上被屆以表使申入小時伊

豫面會從明日一七个日親王御祈被仰出旨被屆

廿二日親王御方來廿六日自飛香舍令移于花御殿

給之旨被仰出候由以伊豫被申出候右ニ付如文化

六年五月度可賜御祝酒之旨同女房被申出候獻物之事文化度有之今度非新殿候間不及其儀之旨同被申出

〔小佐治光文雜記〕十月廿六日花御殿御引移御祝御當日也御内々去十六日御移

〔按〕花御殿は常御殿の北に在り天保十一年三月廿七日更めて東宮御殿と稱す

十二月二十七日庚午御深曾幾の儀を行ふ左大臣藤原齊信二條御鬢の事を奉仕す

〔御内儀日記〕十二月五日親王ゐ御深曾木○御歳七來る十七日と仰出されゝへとも少しゝ差つかへのゝ事あらせられゝニ付來る廿七日午刻と仰出されゝ准后ゐゝ子細のゝ所勞にてあらせられゝ故御所よりゝ便りのせつ仰進ぜられゝ由なり

廿七日今日は御深曾木のゝ祝なり

〔言渡〕十二月三日親王御方御深曾木當月下旬日時内勘文之事陰陽頭更可申渡以楸丸被仰出頭先時參上

申渡候○内勘文略す

五日親王御方御深曾木内勘文今月廿七日時午陰陽頭清書可申渡以楸丸被仰出申渡陰陽頭被附

親王御方御ふかゝきの日時

今月廿七日かのへむま時むま

天保八年十二月五日　はれ親

御吉方　乙卯辰の間なり

天保八年十二月五日　はれ親

七日親王御深曾木御髪奉仕之儀左大臣○二條齊信被仰下御請之旨爲心得以伊豫被申出

廿七日左大臣參入各具之旨御肝煎萬里小路殿御示候、、、○尖點は原本嘉永七年の災に焦て字句の滅せし所以大和申入即可被始之旨被申出殿下申入萬里小路、、入諸事御肝煎三卿等被沙汰之關白殿被、、、右方之後兩役參候御三間西廂、、、、、、、次左大臣殿參進被候、、、、、次公前朝臣持參圍碁盤置石二用御手洗川石置、、、次胤保持參泔器盤右方居柳筥有尻居撤蓋入水櫛髪搔髪鋏等置加柳筥上次、、、持參御帖紙二帖居柳筥置盤左方○二條家日記は泔器を左帖紙を右とす從ふへし次親王令出給、、、、奉扶持次大臣生御髪先左次右此時御帖紙公前、、持之請了今度爲女房所役之旨兼日殿下被命之旨有之次親王令降盤、、中給御扶持同上次役送之人參進撤碁盤柳筥等、左大臣殿被退入次兩役退去其後改供御座撤厚、儲御褥更親王令出給次供饌物女房供之左大臣殿前公前朝臣役之次令入簾中給此間之儀御肝煎三卿等被沙汰之當役不候此座無異被遂行之事院中附評定言上

上野宮尹宮內大臣殿左大將殿二條大納言殿等參賀殿下申入以表使申入親王今日者無御對面之旨

關白殿示給萬里小路殿申入王公已下自三卿被申入（兩役三卿勅別當役送殿上人祗候衆等可有御對面之處同上自餘攝家親王各不參）

左大臣殿へ賜物御使右兵衛權佐參上被居以表使申入賜物（紗綾二卷樽一荷〇干鯛昆布の二種脫落歟）目錄等以伊豫被出之（中略）從親王御方賜御祝儀於菊間御乳人被授之（兩役白銀二枚御肝煎卿金五百匹三卿勅別當祗候各有賜物）

〔二條家日記〕十二月十五日來廿七日親王樣御深曾木ニ付御髮御備忘被召候間來廿四日迄ニ御差上被爲在候樣被仰出候事

廿五日非藏人口へ御使（俊隼）來廿七日親王樣御深曾木御髮御參御備忘御獻上尤議奏面會直達之事御備忘如左

御深曾幾

刻限役送殿上人持參圍碁盤居中央

以角爲御生氣之方盤上石二置之用御手洗川石

次亦一人持參柳筥置泔坏櫛髮搔鋏等居盤左

更初役送人持參柳筥（置帖紙二疊）居盤右方

儲君親王御出令登盤上給

次候御髮人參進

取髮鋏浸水撫左御髮生之役送之人取帖紙受之亦生右髮如左事畢髮鋏如元置之退

儲君親王令降盤上入簾中給扶持之人候之

次役送之人參進撤碁盤柳筥等

更御出令著御座給

次供饌物

候御鬢人同賜之

次令入簾中給

右料紙備中檀紙四ツ折上包同紙御文匣ニ被入御

封被附議奏ヘ被附候事

〔久我家記〕十一月廿四日御鬢奉仕關白殿於御前蒙

仰給之事

十二月三日內勘文下旬（廿三日廿七日廿八日廿九日）更勘進被仰

出候事

五日清書勘文（廿七日吉方等）被仰付候事

六日御鬢奉仕關白殿御理左大臣殿ヘ被仰出候事

十五日左大臣殿御備忘（コトワリ）來廿四日迄御獻上被仰出

候事

十九日左大臣殿來廿七日巳刻御參之儀被仰出候

事役送姉小路少將廣橋侍從等被仰出候事

參賀獻物可爲寶曆十三年度之通哉伺定觸示候事

直廬代可爲御三間哉之事

伺之通被仰出事

御扶持人體事

可爲關白殿御沙汰之事

御獻御陪膳役送可爲女房沙汰哉之事

伺之通

御鬢大臣於同御三間可賜獻哉陪膳可爲殿上人哉之事

可賜獻陪膳之人體追御沙汰

御鬢大臣賜物御使之事

祗候家司之中人體伺定之事

御品女房へ示談

紗綾二卷昆布一箱干鯛一箱御樽一荷

右伺定自御内儀可被申付事

自親王御祝御料理給候人々寶暦之度通哉事

御調度中

小松二本　山立花　青石二御手洗川

右近來之通自御内儀口向へ可被申出候哉事

〔按〕小松山立花の用方は別に見えされとも萬延元年閏三月祐宮御深曾木の次第に宮御出令立碁盤之上給其儀持山橘小松向吉方令立給以御足爪先蹈石給女房扶持とあり蓋此儀と同からん是日親王御服の色目は言成卿記十一月廿七日の條に御深曾木御用御半尻御前張御直衣小葵浮織御奴袴紫地文龜甲上文白蝶丸御半尻ハ

蒲萄二重織物（地文龜甲上文白菊花葉丸）云々とあり

九年戊戌二月十日壬子内庭に紙鳶を觀給ふ

〔言成卿記〕二月十日當番參仕儲君親王於御學問所前庭令揚紙鳶給自餘御遊逸議奏以下近習當番等各申合候御伽親王頗令興給

〔按〕此後猶御遊戲の事諸書に散見ぜり今左に併收す

〔隆光卿記〕二月十六日戊午參內（番也）儲君親王於御三間御對面相番之輩大略相替終日候御前有雙六以下雜事

三月四日丙子參內（番也）晝之間親王候御前議奏近習等從御後於小御所東庭擧紙鳶又寫畫進之有雙六興等予以勝賜物有之

六月七日丙子巳斜參內候番候親王御伽如例又於御小座敷有御香

〔定功卿記〕天保十二年六月廿六日戊申依番巳刻參內宿仕如例自未許侍東宮御前有楊弓御香等御遊申許退了去年頃每日召於御前云々舊冬天皇（○光格帝）御事之後依御慎被停之從一昨日相始云々

十一月六日丙辰依番巳刻參內宿仕如例依召侍東宮御前御遊（御畫）如例

弘化二年五月二日壬戌候東宮御前御遊御投壺予

唱樂譜

〔實麗卿記〕天保十三年二月十九日戊戌東宮召御前有御楊弓

五月二日庚戌東宮召御前有御蹴鞠

〔後勁槐記〕弘化二年五月五日東宮御出御三間光成三卿加勢兩近習等參候以樂太鼓拍子有御投壺

三月二十四日丙申御苑の櫻花を覽給ひ宴を三卿等に賜ふ

〔聰長卿記〕三月廿四日丙申晴午後親王御覽南殿櫻花爾後御內儀等御庭一圓御步行御巡覽樹々滿開也次於花御殿當時親王御在所大宮權大夫權中納言葉室中納言余中園三位行遠朝臣等賜宴被賞殿前花珍重珍重洪恩難書盡者歟

二十八日庚子恭宮逝去御慎三日

〔隆光卿記〕三月廿八日庚子深更自別當以廻文相示條々

恭宮爲御養生正親町家へ御退出中略同宮今晚酉半刻逝去ニ付自今日三个日被止物音親王同三个日御慎且爲伺御機嫌明廿九日中禁中洞中大宮親王等へ可參入之事

恭宮御歲二故前大納言實光女權典侍局所降誕也昨春來御吐乳令惱給而昨夏來令快復給頃日不聞

御不例之事爲御急症歟當今御子數度雖令降誕給儲宮親王敏宮等之御外各令夭逝給爲是如何

〔按〕恭宮は仁孝天皇第七皇女（御母權典侍雅子）天保八年正月廿六日降誕（御產所正親町家）是日逝去（御年二）四月十六日清淨華院に葬り常樂光院宮と號す（執次詰所記に據る）

閏四月五日丙子御遊

〔隆光卿記〕閏四月五日丙子參番終日候親王御前有管絃十曲

〔按〕後亦御遊あり今左に併錄す

〔隆光卿記〕閏四月廿三日甲午巳刻參內候番參親王御側有管絃

五月十二日壬子當直參勤於親王御前有管絃

十八日戊午巳刻參勤於親王御前候御伽之儀如例管絃有數曲

十一月六日甲辰御手習始內大臣藤原忠熙（近衛）を以て御師範と爲す

〔近衛家記〕十月廿五日議奏萬里小路前大納言殿ヲ以テ御手習ニ付御手本可差上旨御沙汰ニ付御請申上十一月六日忠熙參內御手本（假名いろは）獻上同十九日御清書初テ拜見

〔附錄〕

〔示羊記〕天保十三年十二月十七日辛卯依番參内傅大臣（○近衛忠熙）參上今日始御手習拜見祗候之旨被啓以表使言上御返答傳申小時以兒被召之旨被申出卽觸御肝煎之後告傳大臣誘引御三間取合二枚戸内卽以兒被召大臣參進御前此後退候所良久被退之旨兒被示卽參二枚戸邊小時大臣被退（下略）

〔按〕嘉永三年八月五日十二點の筆法御傳授の事あり參看すへし

十年己亥三月二十六日壬戌御紐直

〔御内儀日記〕三月廿六日今日御紐直しにてあらせられ内侍所へ（ゟ初穂百匹ゟまゝ）ゟ使表使なり上御（ゟ小戴一ふたすゝ一折ゟ一ふたなる一蓋）靈社へ（ゟ初穂百匹ゟひも一重）御所へ（小戴一ふたすゝ一折生たい一折こんふ一折ゟたる一荷）立目錄添（高松ゟ使）仙洞樣へ（小戴一ふたゆ一荷）中たかし立ちらし（○中鷹紙竪文散書の略）ゟ使取次（○口向勤仕の役員）大宮樣へ同たん上られ（中略）今日よりゟ髪ゟわらわゟ服ゟ地黑ゟ付帶あろはし御所へゟ禮に成ぜられゟ直衣ゟさしぬきめされゟ花生上られ高松ゟ口上申入ゟ盃ゟ拜領濟ぜられゟて地黑とめしかへなりゟけん臺一箱ゟ拜領（中略）未刻頃ゟいか物ゟ獻參る（○いか物とは嚴儀の御饌を謂ふ）ゟ直衣めし上段にてゟ祝あろはされゟはいせむ大すけ殿ゟ參りゟ手長ゟ乳人ゟ挨拶に大典侍殿へ杉原十帖さあや一卷下され

ハ内手長内乳人へ百匹下されハ所〻よりも獻上物あり

〔隆光卿記〕三月廿六日壬戌今日巳刻儲君親王有御紐直御祝參内院大宮親王准后殿下等申賀詞又禁中親王等生肴一折鯛二尾自餘干肴鯣二連宛近習一統組合獻上了

〔實久卿記〕三月廿六日壬戌親王御紐直也依辰終刻參内付勾當掌侍申慶賀於議奏候所賜祝酒自親王賜御祝儀方金三百匹被授

〔按〕諸儀雜集御紐直の條に御召物ノ御紐ヲ取リ奉リ其紐ハ人々へ下シ賜ハルとあり尚此儀に係る經費の收支を左に錄して公武間の狀況を示す

〔備考〕

〔小佐治光文雜記〕二月九日來月下旬御紐直御治定被仰出總テ文化五年三月之通心得候樣御乳人大判事へ出會被申渡

六月四日左之通御附衆○附武家書付被達

當三月親王御方御紐直御祝儀ニ付先格之通銀百枚奥上相成候樣先達被申出候處親王宣下幷御道具且御紐直等御入用別段被進銀貳拾五貫

目追々御遣方相成壹貫參百七拾匁餘御不足候
得共無御據儀ニ付御拂米代銀之内ヲ以差足銀
百枚差上候積相達置其段間部下總守殿○所司代申
上候處御紐直御入用銀之儀ハ文化度禁裏御備
銀ヨリ出方相成候處當時右御備銀拂底ニ付別
段被進候儀ニテ元來御備出方之廉ニ有之候間
右御不足之分禁裏御賄當亥御定高内ヲ以御遣
方之積取計候樣下總守殿被仰渡尙又奥向ヘモ
申入置候間可被得其意候

六月七日辛未御讀書始從二位清原在賢舟橋を以て御師範と爲す

〔隆光卿記〕六月七日辛未今日巳刻儲君親王御讀書始孝經清二位在賢奉授衣冠單云々出御御學問所中段設御帖一帖御茵等武傳議奏三卿等列座祗候公卿殿上人候總詰源中納言建通供御机了退下次清二位參進御机向奉授三行計三返了退下源中納言又進撤御机次入御云々此事自過日内々有御習禮殿下不參之間子息左大將輔熙卿去年以來時時爲御伽被參仕爲御扶持親候御側云々今日親王御服御直衣二藍三重襷龜甲形御奴袴

〔聰長卿記〕天保九年五月三日癸卯從弼三位○石井弾正大弼の略稱有廻文

來七日巳刻親王御讀書始日時御治定之旨山科

中納言被申渡候仍申入候也

五月三日　　行弘

親王伺公宛

追申參賀獻物等之儀兩三日中否可被示候也

加承之後返與熟思此事兼有沙汰早春三條大納言實萬被尋云御讀書始菅家勤仕之例有之否予答云於御書始者連々紀傳勤仕如古例於內々事者稱御師範不稱侍讀明經家勤仕之事云々如是上者今度清二位勤仕可尋記

五日乙巳明後七日伺候進退被示如左

來七日親王御讀書始ニ付辰半刻可令參集之旨

且禁中親王等へ參賀不及獻物之旨山科中納言被申渡候依申入候也下略

六日丙午入夜移文到來明日親王御讀書始御延引日時追可有御沙汰云々何故之御延引哉其子細可尋記後聞聊御不例之由其實聊御辱个敷思召之趣云々御八歳御尤之御事也

十年六月七日辛未早朝參內依親王御讀書始敷設御學問所修理職方之沙汰也巳刻過出御御直衣久我中納言供御書机次按察卿召清二位清二位參進下段參御前開御書卷奉授古文孝經序三反了入御左大將被候御前武傳大宮大夫議奏大宮權大夫御肝煎按察使三

卿山科中納言園中納言葉室中納言伺候彈正大弼
依重服不參 予能通朝臣公前朝臣胤保等候雁間入御之
後退座以表使申恐悅御祝酒粥等賜之

〔小佐治光文日記〕六月七日辛未親王御讀書始ニ付
辰刻過出勤御祝粥五色汁先附切のし才香物御酒吸物等
被下以表使恐悅申上

〔按〕紀傳道御書始の事は天保十四年二月廿三
日に見ゆ又御書卷御讀了毎に御智慧粥と稱
する御内祝あり左に其一例を附す

〔小佐治光文雜記〕十一月八日今日御讀書滿ニ付文
化度之通御知惠粥御祝

〔御内儀日記〕弘化二年十一月十三日こなたゟ字書
濟ぜられ御所へゟ粥ゟまな一折上られ女院樣准
后ゟはゟ神事後に參る大典侍ゟ始高松ゟはしめ
三仲間○御末女嬬御物仕を總稱す へゟちえ粥下さるゝ
關白ゟ兩役舟橋ゟ近習當番はかりゟちえかゆゟ
祝酒出るゟ肝いりはゟ神事後に下さるゝゟ字書
濟に付御所よりゟまな一折ゟ拜領

八月一日甲子日食に依て八朔の儀を停む

〔小佐治光文雜記〕八月小朔日甲子日蝕六分卯三刻六
分午掛出卯六刻終中略御獻上物萬端日蝕ニ付都テ
明二日ニ相成御祝詞言上同斷